



近世悦美少年録

八編

二



~ 13
3567
37



門 13
號 3567
卷 37

新局玉石童子訓卷之二十二



東都 曲亭主人人口授編次

大江峯張逐之松煙齋小説

文武和合して故人故人を知る

復説韓錦樅二郎大江峯張兩主僕の道理と盡是非と論ぶ。

言よく諫らむかどをめて无明の酔醒て慚愧後悔大なるを聴果貌と

改めて西主僕謝してのさう在下性愚魯也必然の理美小暗く

匹夫の勇と負て彼旅客の孝女を廉士を思ひの好む飽ちて虐け甚

まありの今さら臍と唾ちて千たび悔も及びかたり然ると刀袂們幸ひい

博愛の誠意とめて金言玉語と惜とのを鍼及銀切るとの世のい

我は舊癖を地ふ川除れて昨非と知る小至んや天も明が田文ふりて彼

早稲田 大學 図書館
昭和 34.6.3 入
蔵 書

うら勸解く。俱ぐかり来て家いへも苗なえ願ねがふ二君子詞を添そて樹まく寛解
 多おほく。と又また八重作やへさくも額ぬかと衝つれて愚意ぐいも家兄いへねも異ことる。殆やが後悔ごご仕しりぬ我
 們われ弟兄ていし武ぶをの好このそ。学まなの窓まど疎うすけれ見みぬ世よの聖ひたりと師しと。治ち理り非ひ曲く
 直ちふ惑まよふの故ゆゑ兄あにの弟いと誠まことに弟あに兄いと諫いさるまじく。俱とも初はじ心こころ累かさねと
 悟さとらざりしと面おもをけいいくく恩おん免めんあまかかと等ひとく陪ばい話わて已やまりと成なり勝り
 徐あやふ推おし禁こめて賢けん兄弟ていし先ま非ひと悔くて今いまより善ぜんの與よりの飲のみは是こゝは優よしの
 古いにしへの人のひとへるとあり。三人さんじん醉さけを溺なるる時ときの敢あて是こゝと拯すふ者もの。其その内うち
 一人ひとり醉さけのされさ醉さけふる二人ふたりを助たす拯す之を。共とも侶り死しに至いたるる最も憚おそるる。其その内うち
 殿との弟兄ていし弟子ていし達たちを其その幼こひの道みち理りの差ちがふを曉さとと諫いさるる者もの。一ひとは
 人ひと醉さけを溺なるる者ものと似にううといふふ無な禮れるる。と又また道みち能よも共とも侶りの後のち
 短たん慮りょと敬けい言げんて和談わだんの歡よろこびを演あそぶ程ほど。夏なつの夜よ蚤はやく明あ初はじて牕まどの隙ひまより

朗あや々々軒端のきた近く鳴な且まる。鴉かの聲こゑ少すくええ。樞しゆ二郎にらう驚おど見みたら短夜みづかと
 といふ。美談いひえん佳境けいきやうに入るい。隨ま客きやく人ひと達たちも睡ねむせで。鈍おろや一宵ひとよと過すたり。
 との間ま八重作やへさくの邊へく身みと起たて。其その頭かぶの板い戸とを推お開ひけ時とき八はちと奈な我われ四し
 郎らうの共とも侶りの出てで樞しゆ二郎にらうもふら向むかひて。昨きのう夕ゆふ刀やいば衾ふとの諫いさ言げんと蔭かげさるる
 少すく知しるる深く感かん心しん仕しりぬ。伏ふ計けいの毎まい中ちゆうも皆みな比ひ目め大人おとなをあるるゆゆらん既すでに浴ゆ
 桶か水みづ汲ひ入れて早はやく焼やけけつつけけれれ程ほどと沸わりぬ客きやく人ひと達たちも湯ゆ浴よくと。且また早はや
 飯いと果はて後のちに優ゆ小睡せうすいさせぬか。と家いえ主ぬし僕わらわの膝ひざと杖つゑめて言こと叮てい寧ねいの勞らうふ
 程ほどに押お繪えが薦すするる淨じやうの湯ゆ桶かの養やしやう齒しと塩しほををり添そへ。盆ひら残のこの月つきも
 影かげさ見みぬ花はな涼すずの花はなあり実じつある歎なげ待まち成なり勝りと通とほ能よの歎なげひと演あそぶ且また謝あやま
 軀みて簷えん廊らうふ出いで樞しゆ二郎にらうの押お繪えふ向むかひて。汝なも疲つか勞らうて睡ねむべげげと。先ま早はや
 飯いといいて既すでに知しる情じやう由ゆれれ。今いま朝あさも咄はなりり刀やいば衾ふとを請こををり立たち夜よ會あは
 二

欲ま早飯の外晝餉の割盒を五七口品准備せし時八と奈我四郎通
 宵を眺めたり者煮爇の事四鄰を家家達を備えたる傳せしと云ふ押給の
 ありて心とあり退け時八も是はどうかして否と云ふ人を備ふ要を孰そ
 睡り者多し我門西箇のそんや火を焼くべし水も汲てん奈我四郎と云
 せしと縦二郎推禁めて鶴脛虫所用あり早飯と果一食汝は蚤く人馬會所
 田文まで往還まは旅轎二挺と誂へて巳の比及おをせとのいね彼父女と乘ん
 為へしと云ふいひもを儘奥へ退けは是より先八重作の退りて漱給るごま
 大江王僕ハ其茶を其薦め其後早飯を薦るハ押給と俱ハ給侍ハ果て更ハ
 浴室へ案内をあり是より後其度毎ハ主客の謙遜辭讓の禮即送の
 口誂さそあらんを言省て備ふは看官宜く猜志ハ左右も程ハ巳の時近くる
 下八重作身装して單奥より出て来て成勝通能ハ談言草草在下田文

彼旅客父女と迎へ欲まえれども和君も先ハ橋と耳ハゆらゆら他
 給のあり解だけ昨宵よりの疲労ありと請ふ無心ハ似れども峯張主那里を
 共侶ハおたのめまよとのいふ成勝もうちやて夏の夜睡眠を會するハ各無事の時ハ
 るハ非如一夕睡むとも人我意見と信容て良善の域ハ赴たぬハ我の居る
 俟よりあえや峯張ハ然も思ひぬ飲とのハ通能然と云ふ誰とて留る者ハ
 縦二郎ハ強難て且感ハ且謝ハ八重作と喚て父や刀袷門ハ咱等ハ
 為ハ田文おんと宣はれは汝ハ伴ハ立たん就て亦所用あり耳と云はせと引よせて
 叫れ果て亦おや其東西ハ蝨く敷き給は汝搭駝ハ那里追着け疾せよかと
 吩咐れハ八重作ハある果て退りて衣ハ脱更て背門より出ておはけは是時天
 日ハ昇りて巳の時ハ鐘鐃々々ハ鳴り程ハ遠驛の人馬會所より四箇の轎夫
 二挺の旅轎と昇りてまは呼門ハ當下縦二郎ハ轎夫と勞きて去向を

程小時八と奈我四郎の準備の盒子と両袱小裏一とりの出く。
 搭駝の伴不立ちまを。樅二郎是と見て時八もと嘆ひての事。既二挺の便轎
 ある小仕立の伴不立ち要る。宿所へ退りて疲勞を醫へ我身みづら那里の
 田文の父女の後悔の誠意を示さる。面正もる。伴當連々何小
 せ。合子の後轎を載て。既八と制れ時八と奈我四郎の只得其意不隨て
 二裏の件の盒子と空轎を分ち容れて且成勝通能の為ふと。今朝準備存
 る草履二雙を出て脱水石の上直一措程小押繪も奥より出て来て大
 江王僕と号へ樅二郎の亦押繪小留守のあろと。屢熟睡を誠て
 卒とをり小身と起せ成勝と通能の押繪時八奈我四郎も疲勞を慰め
 且謝して樅二郎と共に轎夫毎と相從て庭門より出て。程小奈我四郎
 時八を門前まで送出て別れて各宿所へ退りぬ。是日留守小押繪の外。今朝

早天より備れ。比鄰の家家考も在るる。小程小韓錦樅二郎の成勝通
 能と共に侶ふ。約莫十餘町立合阪の洞小来て。那父女何地也。父女も
 似在る。大江山僕も訝りて思難々。丹分前。茶店小馳て立上りて
 通能の先媪小向いて云云と。同試る。媪の笑々答て。原米小身考。昨日
 彼替父女小東西尋く。合せぬ。旅客連を。韓錦王も。昨夜の
 彼替者。這口衿の恵心せぬ。仙丹と飲。妙藥の即效も。やあらん。一夜の
 間。彼撲傷の。皆愈一の。打洗され。と。眼の撲れ。始より
 其明亮る。と。鏡の像。癱。脚。疲痛。覺。都て。瘡。果。今朝日
 覺。後親も。少女も。知り。敬。奇感。嘆。その悦。昨日日
 衿達の立去りの。其方。口。顧。伏。拜。父女。姑。且。商量。媪。茶店
 出て。別。と。告。て。云。と。件。の。支。の。趣。と。説。示。折。と。の。渾。不。似。と。

出て是亦爾せよの樂器の今よりの後道路に要る。萬ふひとや咄咄と父せと憐
 思ふ人ありて去方と向を折るもあら是と照据に彼恩徳を説知らぬか。
 然るにその中の隨意賣て銭小換るとも沽れぬ推して茶を言ふると左中も
 右中も做一の恨らる彼刀祢達も是等のよと告まると報恩謝義の一語たる
 演じざるそ本意をらね然らばとるの捨てる連立て杖を言忘れりそと去
 下しとる久しとるゆへに巳の時過なる時候なりと告るも呆る。樅二郎は
 所を知らず當下成勝通能の因果を俱ふる。原来昨日施し神
 藥即效行たを彼旅客の不治の痲一夜の間小瘡果しん孝女と慈父の正心
 誠意を憐れ神明佛陀の眞助こそありらる。そも欽念のる。和談既
 敷正て俱小尋て来一かむる。昨日の儘逢逢おる彼人の為小謀り。千
 萬言の皆空といひ俱小傷る。登見小尻より掛れば樅二郎もその前面る。

登見小倚て却いさう。如く和君達の仙丹神妙未曾有。縦彼旅客の眼
 明小脚疾るとも。這地方と立去り一巳の時過にてのる。日影と
 仰て。一時お過にざらん。必遠くもく。卒の追蒐てと憐ると成勝推
 禁めて。勿論のる。和殿の一身肥満て技と力勝れても及て路も遅か
 権且這里の候。我主僕路の程二里追ふ。逢逢に開里よか。の東つ登
 へ。この通能も俱ふる。遇ふと遇ふ。天の命と力を用ひて其甲斐する。幾人か
 とも益ある。便轎も送一置く。をよけれといひ。這茶店ゆく。賣は草鞋二
 雙と買りて。其緒を締小串にて主僕等。草履と垂来て。件の草鞋と
 穿く折ら。奈良梅八重作の袂裏と背ふ。東の面色悩まける。樅二郎
 早く見おして八重作を遅る。障る。ありて杖と向ふ。向八重作の物あり
 茶店小辿り着て。樅二郎小報る。吩咐ひ。故衣の尚巳の時たる。物のあり

あを三四箇帯を買合せて、まゝ路を撲瘡を最堪かたを穿く。末末
おそ 遅くもたるといふ。主僕小會釋して、登見の端尻と掛れば、樵二郎の嗟嘆して
成勝も小對しての事。在下今日彼旅客父世と迎へて宿所へ相伴ふ。他も衣の
敗れ垢つて、鬱悒からんを儘小俱く、いゝえなままで。準備せよと思ふのうら
咱弟兄弟女弟さ、身材大にやまれば、その衣もて他も父女貸して被せよ世話小
の猫児を、袋小装れ、像く彼身小稱ふべもあらね。今朝八重作小あつて、
故衣店まで、衣三四箇を買せて、目今と束ねられ、その亦十日の菊小似て、空小あつて
鈍まよと、唧言が、くち花を成勝も通能も云と、尉定めて、和殿他も父女の
為小然まよあつて、用いらま。我門さ小飲ひもへ。今無益小似れ、その亦
後小用ある飲るに、飲へいさ。知るべし。就て八重作哥々の暴疾、撲瘡の、飲心
許る。心地甚麼と、語れば、八重作の袂裏と、解下し、答る。最恥しむるも、

よへ、こころ、くね、な、ち、みね、なり、ぬ、り、ち、や、う、け、を、う、ち、み、と、べ、け、さ、
ら、昨宵部領川の上、あ、峯張、主、一、棒、を、受、損、給、け、撲、瘡、小、ゆ、り、今、朝、ま、で、然、
る、小、疼痛、と、覺、さ、り、け、小、方、僅、末、ぬ、中、途、よ、漸、々、小、腫、元、て、堪、が、ま、と、い、れ、と、苦、
る、小、通、能、散、馬、で、て、そ、亦、不、慮、の、ま、り、然、と、も、彼、仙、丹、今、も、尚、我、腰、小、在、り、用、ひ、
る、必、即、效、あ、ら、ん、先、の、棒、瘡、と、見、せ、ぬ、と、小、八、重、作、面、と、皺、め、て、衣、領、甘、け、
右、の、肩、と、祖、で、て、示、さ、し、見、る、小、現、腫、元、て、練、の、像、く、その、色、の、灰、後、れ、る、小、似、
て、う、ら、ん、疼痛、と、と、想、像、成、勝、の、眉、を、擡、め、て、昨、の、不、慮、の、兩、敵、た、り、今、同、志、
友、人、る、小、残、る、痕、と、是、非、を、け、れ、と、小、樵、二、郎、も、驚、馬、憂、ひ、て、是、小、就、で、て、も、峯、
張、主、の、槍、棒、修、練、の、至、妙、と、知、る、小、八、重、作、が、為、小、一、も、好、修、行、小、こ、し、ひ、る、と、い、ふ、
間、小、通、能、の、彼、仙、丹、を、こ、り、如、て、八、重、作、の、棒、瘡、小、隈、も、る、冷、ま、り、と、鼻、紙、と、の、
其、蓋、も、あ、つ、杖、け、と、祖、と、斂、さ、り、誘、と、ま、り、小、成、勝、と、い、て、立、て、出、ま、ま、れ、樵、二、郎、
も、立、如、く、咱、弟、兄、も、共、侶、小、必、小、言、説、る、れ、も、い、ら、ぬ、如、く、我、步、疾、く、と、八、重、

作さの善よあること得たまふ見捨みすけられば本意ほんいあることをいふれといふ間ま成勝なり通能とおのの
 亦またも果たまき歩あ信ましてゆらる方かたと心當こころあふ彼かの父ちち女むすめを追おふらける。樵しやう二に郎らう是こゝは
 送おく果たまては轎こ夫こ小こ向むかひてゆらるは汝なんぢもも知しる情由じやうゆ多おほくは茲こゝでは俟まちたらばは亭てい
 午ひる小こ程ほどももあらずは先まづそのその盒はこ子ことと合あはせては宜よろくは腹はらとと繕つくろひて彼かの方かた衿きん袖そでをを追おふらける
 然しかれば若わかくは彼かの父ちち女むすめのの逢あひ逢ひの刀やいば衿きん袖そで達たつ兩りゆう箇かんととちち兼かてはかかりまるもけしらうののあらははるも
 然しからばとと説と論ろんせし轎こ夫こ毎まい日にち異い議ぎ小こ及およびしては便べん轎こよりより盒はこ子こととりり出でては兩りゆう箇かんとと樵しやう二に郎らう
 郎らうのの身み邊へ閣かくのの四し箇かんとと各おの各おのちち用もちひて媪おやぢのの茶ちやとといいひし者ものととりりては早はやくもたらんど
 竭つくは残のこるる盒はこ子ことと共とも侶りよ小こ故このの如ごとくく小こ袂たもと裏うらとと便べん轎こ小こ斂しやくれば樵しやう二に郎らうとと八はち重じゆう
 作さののくく来きては袂たもと裏うらとと用もちひて包かこひて轎こ夫こ小こ示しましるは此こゝはは是こゝはは彼かの旅たび客きやく父ちち女むすめ被おひかせる
 せまくは思おもひし衣い物ものをを帶おももりし汗あせ衫かみさももあらずは是こゝははもも便べん轎こへへ納いれてはたたねたるも餘あまりもなし此こゝ
 如ごとくく此こゝののとと去い向むかひて町ちやう寧ねい小こ指さしせるは轎こ夫こ毎まい日にちあらるも如ごとくく二に挺ていのの空くう轎ことと拾しやく起き

ああれれ大江たいか主しゆ僕ぼくのの去い向むかひて投なげてををいいては姑こ且かつとと樵しやう二に郎らうのの茶ちや店てんのの媪おやぢ小こ向むかひて
 りり多おほくく彼かの旅たび客きやく父ちち女むすめをを置おきし土つち産うみしとと汝なんぢもも知しるは是こゝははもも便べん轎こへへ納いれてはたたねたるも餘あまりもなし此こゝ
 頭あたま小こ置おきしのの妙たぎをを我われ小こ賣うりしとと買かひしとと欲ほししとと汝なんぢもも知しるは是こゝははもも便べん轎こへへ納いれてはたたねたるも餘あまりもなし此こゝ
 少すこしし知しるは是こゝははもも便べん轎こへへ納いれてはたたねたるも餘あまりもなし此こゝ
 茶ちや店てんのの媪おやぢ果たまりし感かんをを左ひだり右みぎとと受うけし満み面めん天てんとと斑まだら小こ脱だつとと板いた齒はのの涯へ頭あたまとと
 高たか咄うたとと且かつのの多おほくく意い物もの体たいのの價あらわいし直ちやく三さん味み方かた僅わずか話わさしとと如ごとくく彼かの旅たび客きやくをを
 荷かりしるは是こゝははもも便べん轎こへへ納いれてはたたねたるも餘あまりもなし此こゝ
 けけりしるは是こゝははもも便べん轎こへへ納いれてはたたねたるも餘あまりもなし此こゝ
 店てんとと借かりしては所ところ要いとと辨わかりしるはは其その茶ちや錢せんとと兼かへりたらばは中なねねとと掖え寄よぐぐ件けんのの
 方かた金かねとと合あはせらればは媪おやぢ困こんんとと辨わかりしるはは幾いく回かいとと戴たいはは腰こし小こ着ちやくたるる
 匾へん囊なうのの口くちとと用もちひて杖じやうとと斂しやくせしては更さら茶ちやとと煮にては薦すゐるる程ほど八はち重じゆう作さくののめめとと得たまふは



からやき
 韓錦と田て
 主僕旅客
 を逐ふ

茶店の煙

のこり

八重子



かこり

みち

るる

五石童子訓巻五

文彦堂

〆ま。先柱小身と倚て打盹て在りける。詭然とて覚たる像く腕と捨り
 身と起して。樅二郎小向ひてのき。家兄最奇きりけり。我身の撲瘡早小愈て
 浮腫のゆら疼痛と覺を正。是彼仙丹の即效るる疑ひる。この樅二郎
 歎びて。初我彼旅客の目さへ脚を破られ。其大疵の一夜の間に彼仙丹の即效
 る。瘡の果しと一奇談と疑ふとあるは。然ともあるが。思ひ小今の奇效の
 是目前現未曾有の神薬なるか。汝恙もあらざる。弟兄這里で彼人
 人と居々俟んぬ。無禮に御向彼刀衿の我脚の速からぬと。故意這
 里小送され。脚の遅速小由る。ああら。彼父女と實解せし。我身も俱
 追ふ。愁事事の障りあるもやせんと。豫より思慮れし。ああ。然れども
 汝の格別之畫餉と喫て疾邁ねら。八重作有理と。心て傷あ。けは一
 つ。箇の盒子と引よ。さうら。用ひて。心と共小長からぬ者。合抗て喫程小媪が汲

の。薦のぬ。熱茶の茶碗合外。指と焦し。噫。執や。と。多と振り口小哺ま
 せて。汲更さる湯小水と。あ。と。往方。定めぬ。人を追ふ身。膽向ふ心。頻小
 いて。語。六藝の外。早喰早走り。物比。圖。圖。吞小盡。した。盒子。と。其
 折もよく。追着たる。飲と。さる。小立て。見居て。見物。思ふ。心。不得。昨。夕。より。疲。勞
 され。あら。され。外。の。見る。目も。皮り。ある。碓。浦。舟。の。漕。舟。の。楫。あ。あら。な。腕。枕。横。臥
 する。寝。とも。知ら。ぬ。晴。たる。天。小。似。け。も。る。是。軒。睡。の。雷。霆。車。く。ま。で。小。久。く。熟。睡。去
 たり。け。有。右。一。程。小。日。の。敵。死。て。未。牌。の。中。浣。過。る。時。候。外。面。より。來。る。者。あり
 樅二郎。其。聲。响。小。愕。然。と。驚。覺。て。こ。見。れ。來。ぬ。人。ら。な。峰。張。通。能。之
 けれ。ある。賢。君子。早。かり。餘。人。へ。は。不。事。ま。さ。り。飲。と。問。ひ。躑。躑。登。見。と。讓。り。て

茶店の媪と促し、前茶と薦めて、旁へ通能の合笑を、聲と低めて答
 る。韓錦主、欽びぬ去向の首尾、さうも、御小の茶店と申し、我主
 僕、足下信しく、彼父女と逐ふ程、約莫一里有餘、小と字と、梳會と喚、故
 なる村落、飯店あり、件の父女、其店鋪で、晝餉と喫て、ありけり、已、免早く
 見出し、ける。その教ひ、のうも、あら、主共、侶、我入と、名告と、まれば、彼父女、若者を
 禁め、得と見て、慌惑して、發見より、痕、像、地上、伏て、三拜、四拜、尚、足、を
 幾回と、う、願、と、衝て、感謝、不堪、と、且、以、を、う、兩、因、人、上、在、を、小、人、過、世、福、あり、を
 曩、の、禍、鬼、身、の、資、縁、と、く、這、兩、眼、と、打、洗、され、の、向、腔、と、折、り、ま、し、り、目、无
 後の、磯、小、漂、泊、し、脚、を、鮮、の、澤、邊、に、惱、る、進、退、既、ふ、合、り、て、父、女、袖、乞、ふ、る、
 ま、で、の、口、饑、渴、の、迫、り、お、ろ、ろ、菩薩、の、弥、増、兩、君、子、の、過、ら、せ、あ、は、し、進、退、し、
 世、小、未、曾、有、の、仙、丹、と、言、く、施、し、ぬ、り、よ、即、效、神、速、失、を、是、亦、尙、せ、兩、眼

隻脚も、故の如く、小瘡果て、自由と、い、け、り、の、を、昨日、賜、り、金、さ、あ、れ、金、く
 那首と、立、去、り、て、餘、毒、と、避、き、思、ふ、の、う、ら、兩、君、子、の、供、恩、德、を、仰、け、須、弥、も、猶
 低く、伏、て、思、へ、四、海、も、猶、淺、く、る、え、教、ひ、と、亦、稟、を、承、り、も、る、那、儘、小、く、其、後、の
 安、不、也、の、同、つ、ま、る、り、あ、ぬ、と、あ、ら、苦、く、思、ひ、の、を、投、て、往、方、に、定、め、終、ご、も、今、日、を
 女、兒、と、扶、掖、て、方、統、這、里、ま、る、來、け、る、小、料、ら、さ、り、け、る、兩、君、子、も、亦、這、路、と、過
 と、を、ぬ、秋、の、か、さ、る、に、再、會、の、夢、秋、現、秋、夢、多、ら、ぶ、覺、ま、も、あ、れ、と、諄、復、を、親、い、ら、
 る、り、少、女、子、も、感、涙、袖、と、絞、る、ま、で、不、受、恩、惠、と、云、ふ、と、般、雷、詞、の、露、を、清、
 れ、心、を、知、ら、れ、る、我、們、主、僕、は、果、て、且、慰、め、に、合、る、や、已、も、兩、箇、茲、ま、を、來、ぬ、の、に、
 父、女、と、追、ん、と、之、豊、の、痲、瘡、の、早、小、愈、と、今、朝、父、女、共、侶、小、那、里、と、立、去、り、あ、ひ、
 と、り、茶、店、の、媪、小、は、知、り、て、遺、し、置、れ、渾、不、似、と、見、る、小、餘、波、の、惜、ま、れ、て、い、く、
 面、談、せ、ま、欲、し、く、思、ふ、よ、う、さ、あ、る、の、を、空、中、せ、と、那、里、を、さ、る、去、向、と、心、當、小

跡と慕ふてあると告るの教の父女は亦只感謝の外のみ且敬ひ且畏
 る左右の身と起さるり我主僕屢請を先其晝餉と果さるり却
 共侶小片隅る登見不徒り頼と文へて密談數刻及びるその要路の條々
 僕と媒人との件の旅の父女と和睦の酒盃を饒される白猪の宿所迎
 執て扶助ふるらんと抗言した誠心誠意の崖畧と主僕迭代り傳示して只管和
 睦と薦めか父女の耳と敬けて果て謝しての世も人もの捨られて袖を
 遠くとせ玉趾と枉きせぬの親も弥増大慈善好が上も好れと教諭せ
 る身何ぞ不推辭するんぞ如た彼韓錦が一語の下昨非と知り恩
 蚕く地と易も亦両君の徳由る人既小本然の善小復り和睦と請ふ猶

疑ふもあつてもあつても鄙語の愛小懲て亦非と吹くが如けん左も右も
 の隨意宜く馮心とせると言語雄々々答るりから和殿のわびぬ彼轎
 夫多々空轎と昇々々の店頭と過ると腋子と見出しと一聲ヤヤと喚被
 れ轎夫毎の敬馬と見る見えの飲して原來茲小在り幸あり幸あり
 後一箇の轎夫扶入り我主僕小告る旅客達と迎へよと韓錦ま
 吟附らて乃衿の御跡と慕ふていそを就て乃衿の晝餉の盒子も又客
 人小まあせよとある衣物も袂小包と便轎の裡あり先腹と繕て出させ
 ると説託れ其餘云固の轎夫へ頼と胸に流る汗と拭ひもあま便轎の方を
 開きと盒子と袂裏を合ひ出さず咱も不渡まお大江腋子も云と轎夫
 勞き先彼等も登見と分ち酒飲せよと却件の父女向いて和殿の心を用ひ
 られる事の趣云と告て衣も被さる後轎に乗と薦め小件の父女も

従ひて又親具を合さる。我門孤獨の旅客多し。西君子の徳美よりて恥と雪るの
 事も昨の冤家の今の知事あるらる。世稀なる幸いといふ彼人贈るれども
 和睦の禮も及ぶもの衣と被てその轎子に乗て那里へもる。西君子
 示教不悖る。無礼を非義に似れども。我身病後あ
 るれども。路と走り疲勞と覺も。便是仙丹の經驗こそ。いふと。なり。受
 引くも。あらまけり。か。お。八重作舎弟の撲癩早。愈た。跡と。暮。あ。く
 来。不。けれ。我。門。馳。て。呼。入。れ。和。睦。成。就。の。願。未。と。云。云。と。告。示。ま。合。弟。の。心。歡
 び。不。堪。先。仙。丹。の。奇。效。と。謝。と。茲。小。割。彼。父。女。と。和。睦。莫。逆。の。口。誑。と。演。和
 殿。今。朝。も。彼。茶。店。の。俵。と。告。知。各。齋。した。彼。衣。と。件。の。父。女。不。被。せ
 多。き。ま。の。彼。旅。客。へ。猶。辭。と。在。下。子。路。の。勇。を。け。れ。も。衣。の。蔽。れ。る。と。恥。と。せ。ま
 只。不。義。の。富。と。欲。し。く。名。利。の。奴。の。做。ら。ん。と。恥。と。を。強。情。に。似。て。必。も。口。の。隨

あり。と。胸。最。安。く。い。れ。と。い。と。腋。子。猶。論。し。和。殿。の。心。の。清。か。夜。光。の。玉
 珠。と。い。れ。も。亦。已。と。在。て。人。の。意。見。不。從。を。温。良。の。君。子。と。を。い。ふ。既。不。和
 睦。の。整。去。し。彼。人。の。贈。物。を。受。ま。す。あ。の。心。の。隔。あ。り。似。て。橋。と。渡。去。し。我。門。三。倒。不
 面。伏。て。快。ら。る。所。あり。の。美。を。思。ひ。ぬ。ま。と。説。れ。亦。旅。客。の。默。然。と。一。と。辭。ま
 る。由。る。な。ら。や。ふ。し。と。答。る。事。教。諭。定。其。理。あり。然。ら。其。衣。と。借。ま。り。て。父
 女。の。身。の。皮。と。繕。ふ。轎。子。の。美。を。從。ひ。か。う。と。い。ふ。腋。子。も。已。ま。も。開。と。亦。強。ん。と。ま。ま。か
 老。商。量。竟。不。教。去。か。我。門。主。僕。の。合。字。と。用。て。物。欲。多。し。腹。と。繕。ひ。亦。旅。客。父。女。も
 薦。め。て。び。著。と。合。せ。餘。り。合。字。之。重。作。舎。弟。と。轎。夫。等。不。盡。さ。せ。俱。不。出。ま。く
 志。増。程。不。咄。ま。の。美。を。送。早。く。和。殿。不。告。も。知。ら。ん。と。走。り。て。か。り。ま。る。へ。彼。旅。客。の。思
 未。増。清。白。の。扇。士。其。姓。名。と。問。試。し。原。是。此。石。の。人。氏。先。路。鷲。林。松。煙。齋。と
 號。ま。り。其。性。手。迹。と。好。む。長。吾。歳。の。昔。より。弘。法。大。師。の。法。帖。と。字。と。手。と。歷。て

聊筆意と云ふ所の人の師あること好まむ故ありと稔近く諸國と偏歴ふ
 隨小其書と云ふ人其其洞筆と云ふ父と女兒の盤纏小充る者入と和殿の
 美と知りて欲と向きて樵二郎の悦小堪む含笑する頭と拊て通能小謝と
 在下性愚也。是茶漫の罪よりある尚而君子の扱引るを彼人の怨早小
 解て今この田地小至んや彼旅客の姓名の呈表小せざる小あらねども
 炭合ね果の送小然と累ねて田文の食乞と罵りのも松煙齋と號するより
 思ひも出さるは実小恥死て小と答る詞も訖らぬ見越松時八と鶴脛
 奈我四郎の韓錦弟又のかきの邊にを俟不樂て心許るや思ひに迎の為來小
 け樵二郎の喚近づけて和睦の首尾と告知る時八を疾我宿所と推給小他
 示して客人達の御食饌の用意といふね。推立給時八を心も果むと
 隨踵と旋りて白緒と投て走りける。浩處小八重作の成勝号小先と單

慌くか多先通能小會釋して兄樵二郎小報るや。松煙と彼の旅客の強
 情小も歩ゆより未れと少女と云ふや。大江王が誘て彼便轎小うち乗て
 目今其首を俱せられ。和順の對面小途中の酒を酒する。酒を飲むと
 とも亦大江主の相計にて菰會の飯店也。酒般と沽合りて。残る空轎小うち載て
 ともこの齋厨のいあること。這里腰掛茶屋で。登見の外小坐席る。あ故小少
 女と云ふ儘小猶便轎小在らるもよか。あると云ふと大江主小吩咐らる。その
 ると告ると樵二郎らゆて并ら亦意外の造仕と送る隈る。刀袷の拮揮成
 孰り推辭へ。奈我四郎と八重作と俱小彼人々と小迎よ。いよくと云ふも。衣領檢
 合せ身繕ひて。松煙齋号と俟程小通能も共侶小店前小立て在り。程
 もあら成勝へ彼少女子の便轎と先小立して。松煙齋を俱して來ぬ。後方小從
 八重作奈我四意氣揚々たる。開中。小松煙齋の打扮。都て昨日の寢妻れる小

似ぎ縹緲織る仁田山紳の夾衣の尚巳の時をりるを被て烏羅の外套綺羅を
 彼朝櫻と狭き短刀と腰に帯る人骨相鄙うる實は是文人也昔其某甲殿
 仕たる刀筆の吏小のやあらうと見え面部の卷痰の一夜の向小皆愈てその迹
 送り一の茶店の媪は是と見て舌と吐胆と淡して奇き奇きと稱賛を當下
 榎二郎と通能の左右別を相迎て引て茶店に請入る小少女の便轎に乗たる
 儘也猶も少き壯夫等の圍坐するの陝楚の少女と交ふもあらざれば
 成勝の美とあるを以て形如く相計たり然れども茶店松の柱樹と柱の
 竹と横きて柳もある葎善天井の外物もる只奥よりたる所を壊と云る
 装束上は簷廊の像ふある故る回道の華席と繞る之故布なる大江
 主僕等の長席小松煙榎二郎等と請登る程八重作と奈我四郎の茶店の
 媪小の酒と盃の酒菜とたまふ盃なもあをるれば茶碗と茶托小の

載てのくもるものとう。當下成勝通能の俱ふ詩の詞と演て公中兩賢兄我
 不肖小を事聽むと云る和睦の款びと盡まふ及びていふせん口も亦旅
 客の席と用ふ所する故古語云一樹の陰不相坐と一河の流れを汲
 ばむ欲まいく海容われかとのう両箇の茶碗と分ちて左右小措て薦れ榎
 二郎と松煙齋の俱ふ茶碗と受載て謝と且榎二郎がへら在下性悪
 人を知る小維疎く短慮浅智の癖れ廉士孝女と居居る其罪萬死小當
 ると幸ひふ大江峯張兩君子の幫助小よと主の然と解ま八款は是小優
 者る願ふ今日より刎頸の文と許される喜憂と分ち樂と共ふ身と終る
 まで違ふことあるべ倫の拙言小背れ身天雷小敷摧れて来世の永劫捺落
 論ん急々如律令と拙言畢れば松煙齋も俱小拙言いて今や怨敵骨肉小等
 魚目衛の好と結れる款びと演る時峯張通能ある酒と程士瓶と把

左右一齊酌易と和睦の式禮支終れが少女の便轎の戸を叩いて出さず
 する小草履なけれは。隨小を權二郎多小向いて顔と衝礼を做さその奉動の
 大人備たる人食ヤヤと感稱を开か中松煙齋の權二郎小向いて御向已
 父父の為小美衣二領贈りぬ。それより當りがらる小況轎子をして迎へれ
 たる抑何もの結構を芳恩謝さ小詞を。最辱くひと。權二郎少あまふ
 皇表の友人等小仍季々奪果れ玉ひと。當時人の噂小あまふ。我知る小
 小不快なる所中。切て然るりの衣入ると。償小あまふ。思小あまふの寸
 志小あまふ。松煙齋の感謝小堪も成勝と通能も。王客の廣直任
 使と稱て云云と慰れぬ八重作と奈我四郎の亦改む松煙齋小名吉と
 和睦の祝書。その物ひも餘りある茶碗拾を轎夫等小も。残れ小樽と書
 させ。温さ入漏れぬ茶碗酒の馳走さ。夕陽刺さ。古段筆の目文ら

ついて皆落酔ゆるる小けり。當時權二郎大江主僕小謝く。両君子此御
 庇也。今又一箇の良友とゆふ。既小日影の斜中下哺小あまふ。誘ひ松煙
 主共侶。宿所へ請ふ夕餉と薦ん昨夜不睡の疲労也。を嫌く
 去らぬ。と。王僕の小あまふ。その美の敷未足らぬも。茲の長譚の園あまふ
 皆立ぬ。と。松煙齋も辭あまふ。左中も右中も諸君子の隨
 意従い。小饒しぬ。と。起せ。八重作の轎夫も。あまふ。松煙齋
 小。便轎小乗さ。欲さ。松煙齋の推辭て乗ら。口得少女の乗た。復
 轎小先小立。空轎小物。空樽を乗せて。後方小解せ。開中
 通能。茶店の媪と。芳あ。茶價と。合。欲さ。媪。決して受納。其
 その美の御小韓錦主の金を分賜りたる。過分の茶價小ゆら。今亦
 何を收受さ。と。推辭。亦權二郎も。禁め。此も費させ。と。被立。茶

けの當下成勝通能の西の方と膽仰て尚暮るる大程あるは已に田文の
 地へ詣て述よりちんとし事情と云ふと樵二郎小告い然らば八重作を
 奈我四郎を案内の為に従へて彼等両箇小吩咐ると成勝と通能の遠く
 もある程多ふ御道守見へ要る一とて蚤も路を横ぎて地藏堂と投ぐいそ
 けり。介程小韓錦樵二郎の第八重作共侶小松煙齋父女小相俱して白猪の
 宿所へかゝる来ぬ其路三四町小ありし時奈我四郎先走りて押給ふ右舌
 るやうに然し其日の留守ある見越松時八厨拵れ果し折主の還る
 とつとつか鶴怪奈我四郎と俱小折戸口まで出迎へる其敬礼大なる當
 下樵二郎の轎夫もあつたをて少女の便轎と開ぐ儘小簷廊小昇り
 されへ押繪の蚤く出て來り其戸もとり推開てと合ひりて坐席小請待し是
 日少女の打扮の思ふも似き鄙るる緋梅織る陸尺袖の夾衣小緋の細の汗衫

すそ長く端磨たる金襴の帯玉梓小締做せる年紀二六可也桃花の唇臥蠶
 の眉有斯る縣のふりも足る春の井化の京都も秋の月の浪速も侍ヨラ
 ちと見ゆものなら潮る所いも浴せま然しも長る雲鬢の故の儘之梳らむ
 只草も束をりける磨は送せる鏡の塵狹玉小疵ある心地とと思はぬ者えりは
 當下八重作奈我四郎の轎夫等皆門の方へ入れて茶と飲せ足と取らせ
 返り遣りける是より先坐席る樵二郎小松煙齋を上坐小請薦ゆる送の謙
 遜惜果て賓主の席定りて押給ひてとて松煙父女茶を薦め
 果子と薦めて和睦の飲言町寧る名對面小松煙齋の席を避て思ひか
 けり今宵より王せらる欽びと陳れ少女の親の後方ちと膝を枕せ樵二郎
 及押給ふ衣き後轎を惠れる御食應の儀も過世怪死身の幸と謝さ
 由言語言を初々しくの見えけり押給ひてと尉を兄樵二郎小向ひり

昨日の日の長は涯りあるも其暮ねとも客人達の物有は時候小をを
 ぬれ夕饌とやまわらまはれといへ樵二郎領をそれかゝる半ねといふ松煙齋推禁
 めく不吉巳等のさる方僅田文の茶店を沙量あわれを酒菜を飽きたる
 作りかた夕餉のいさ欲が況大江峯張のまゝの来さぬと候きく已
 等の物賜ら無礼に非羨も捨て居せぬと辯を樵二郎強難て小貴
 意小仕来今愛も小意も先果子もたえぬ押給那茶の冷らえ汲易
 まあ存まゝと云々押給心と云々茶碗拾きて漆盆小載ていそぐ立小けり是
 りの後樵二郎の松煙齋と對坐して四表八表の言の次大江峯張の徳と稱
 え已が短慮浅計を後悔の外も松煙齋慰めて其美八和殿のなつら
 咱等も一時の奴心不棄くと不測の禍と醸する年小似はるは仍も世に塞
 翁が馬るる寛家の反て知己とる一富一賤文情異なる損益両方我に存

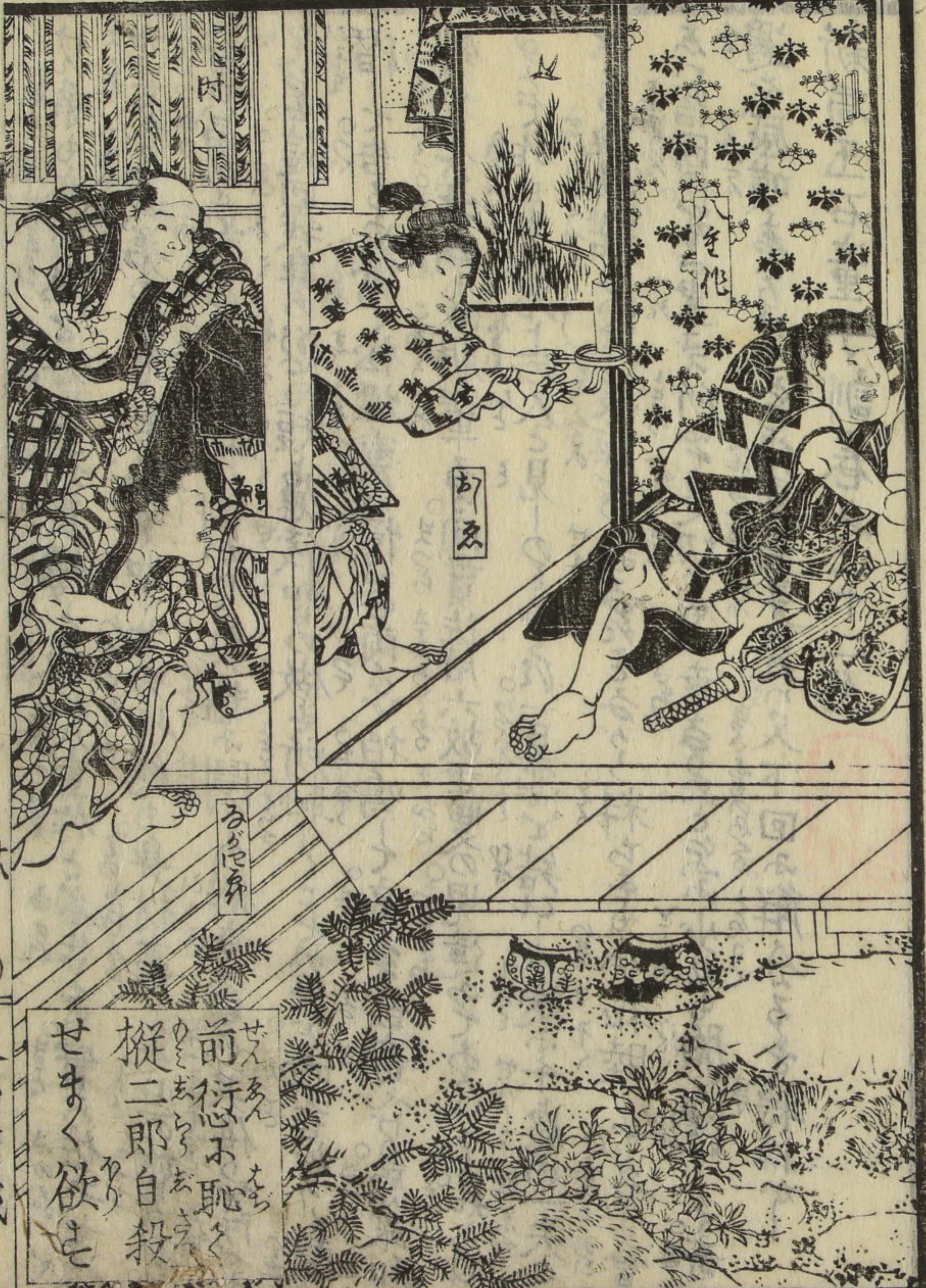
その志合され肝胆も胡越の如く其志同ければ千里も合壁小似るべし
 果を食者心小あそといれて樵二郎嗟嘆小堪も貴老の正小字向り
 識のまゝ心操の方正る已が上人及ふを不あま就て語も貴老の正
 流石の人也這年来る跡とて諸國と遊歴あふ不あまや因て思ふ其稱
 號路鳥松煙齋と喚喚做さるる故あると昔由緒ある名家の末孫と
 らふと我上と詳小告げまもあら何をりて疑ひと解れ既小斯莫逆の文
 結とゆる上の今ゆら遷まざるもあら我本貫も流石と父の間貫佐用六郎故世
 と喚れて一諸侯の舊臣を系故ありて流浪も我身影も歳より比二親小
 携れて同胞俱ふる地不あつるの後父母世と去りて我身の便着るは隨小武
 執云と口を餽ひしり地方の人綽號して韓錦樵二郎と喚做したる
 只角觥の上の酒も本姓の間貫氏を佐用二郎茂洋是へ弟兄念る因果へ

六の段第五十三回
のちめ不見えり



五石堂子請巻

六の段



前心不恥
縦二郎自殺
せま欲

三十四回

六

文楽堂

けん弟も亦角能と好む。奈良櫻と喚れ八重作と名告とも。實は佐之七次
 世是之又我弟のまゝ見らむ如く。女弟押繪も身材高く。此の精力あり。
 皆只勇と好むの心。樹伶俐からされ。播小鬮くの僻責を。外其侮りを防ぶ。
 足らぬ。今回我身の怨も短慮。浅智の做す所。恥しくこそいふ。喞言がましく聲
 潜して告る。驚く松煙齋の憶を。面を拍鳴して。奇き哉奇き。原来和
 殿弟兄。我為。故朋輩る。間貫佐用。六故世世の児。達せありける。知らぬ
 ると。昨日まで。路上の人と見し。を一日。怨と結ひ。送ふ。千慮の一失と。
 今も孰れ。執諾る。後悔を。詮る。とる。料らま。今和睦と。名告會
 去。宿因の。も。盡る。所。是切。の。幸る。死。と。少。女。胸。と。淡。く。奇
 遇を。感嘆。を。りける。あの。段文。尚。遅。けれ。又。下。回。解。分。る。を。聴。後。か。

新局玉石童子訓卷之二十二終



